

精神分析論概説（案）1

神谷かつ江

1. はじめに

心理学コースを志望する学生に、“あなたはなぜこのコースを選びましたか”と尋ねると、“他人の心を知りたいから”“人間関係を円滑にしたいから”“カウンセラーになりたいから”と答える学生が多い。その学生に“では、あなたは自分自身の心について知っていますか”と尋ねると答えられないことが多い。

私たちは当面する問題がなく順凡満帆に物事が進んでいる時には自分の心については別に気にもかけない。しかし価値観も生き方も多様化し、現代社会で生きていくのに悩みのない人は皆無とっていいくらい、何らかの悩みを背負っている。自己嫌悪に陥ったり自暴自棄になって自分の心さえも思いどおりにならないことに苦しみ、哀しみにうちひしがれる。そして今さらのように心も肉体同様、自然の法則と一定のメカニズムによって支配されていることに気づくのである。

精神分析の創始者フロイト。彼は心を病む人への限らない愛と臨床の場で得られた所見を基に、心に対する自己への省察を科学的に解明しようとした。

本論は精神分析の正しい知識と理解を伝えることによって、無意識の心を知り、本当の自分を知ることによって、学生自身の心に対する主体的課題の達成を願って筆を執った次第である。本論がフロイトを知るための契機となり、今後の勉学の道しるべとなれば幸いである。

なお、以上の考察を基礎として次稿においては心に対する他者への理解（子どもを中心として）という観点から論じてみる予定である。

2. フロイトの生涯

精神分析の創始者ジークムント・フロイトは1856年に、現在のチェコスロバキア領のモラヴィア地方の小都市フライベルクに生まれた。父親のヤコブはユダヤ人の商人で毛織物の販売に従事していた。彼は最初の妻との間に2人の息子があったが、40歳の時19歳のアマリー・ナタリゾーンと再婚した。翌年フロイトが生まれたが、この頃には2人の異母兄たちはすでに成人しており、とくに長兄は結婚して、小さな息子（ヨハン）まであった。ヨハンはフロイトの幼児期の競争相手として、あるいは1つしか違わないのに叔父と甥と呼ばれる関係を具現する存在として、幼いフロイトの心の中で大きな役割を担っていた。この後フロイトはさらに5人の妹と2人の弟たちが生まれたが、この若い母親から深い愛情をそそがれ、ゆるがぬ愛と信頼は一生にわたって彼の自信の強力な支柱となっていた。

フロイトが4歳のとき、当時、動力機械の発展により手工業が衰えたため、一家はウィーンに移住した。ウィーンこそ、彼がナチスに追われて83歳の時ロンドンに亡命するまでずっと住みついた愛すべき土地であった。ウィーンでの生活は極めて困窮した状態であったが、フロイトは両親の愛情を一身に受けて育ちきわめて優秀な生徒であった。

彼は自分がユダヤ人であるという強い意識をもっており、当時のウィーンで、人々の偏見と戦っていくためにはお金になる仕事を選ぶしかなかった。1873年（17歳）にウィーン大学医学部に入学した。もともとは哲学を志したかったようで、医学にはあまり興味もてず、隣接分野をあさりまわり、化学や哲学に多くの時間を費やした。20歳のとき、当時ヨーロッパの医学界で指導的地位にあったブリック教授の生理学研究室に入り、神経系の発生する組織学的研究に従事した。この教授を通して身につけた科学思想こそ、フロイトの精神分析を支える中心であった。フロイトの「科学的世界観」は実はこのときの「生物学者としての研究生生活」[®]のなかで培われたのであった。1881年にウィーン大学医学部を卒業したあとも、生理学研究所に籍を置き、熱心に仕事を続けていた。しかし先輩との年齢構成の関係や自分がユダヤ人であることにより、その研究室にいても教授になる見込みがなくなってきたことと、恋人マルタとのほげしい情熱的な恋愛におちたことなどと相まって生物学者から臨床家へ転回を遂げることになった。つまり結婚するために、収入源が確実にもてる臨床家になる覚悟を決め、この目標に向かって4年間努力していったわけである。私たちはフロイトが臨床家を志した動機が、つまるところ恋愛・結婚と経済的収入を確保するという現実的な事情だった事実を知らなければならない。

このことは有名な言葉で表現されている。「愛することと働くこと」「飢えと愛情の葛藤」「自己保存本能（抑圧）と性本能の葛藤」という人間にとって究極的な課題がフロイトの自己選択の問題であり、彼の人生観をもっとも具体的に体験させた出来事である。

こうしてマルタとの婚約を契機にブリュッケ研究室を辞したフロイトは、神経症医つまり臨床医の研修を志す。1882年（26歳）には研究に従事するかたわら、研修医としてウィーン総合病院の神経科に勤務することになった。そして3年後には「延髄における神経伝導路の解明」という論文によって神経病理学の私講師の資格を得て、一人前の開業医の資格をもつことがで

きるようになった。

しかし精神病医として開業するのに先立って、良い指導者を求めて、フロイトはパリに赴き、J・M・シャルコーのもとでさらに研修を積んだのであった。当時シャルコーは神経症学の最高権威者であり、その指導下におかれたサル・ペトリエール病院は各地から留学生の集まる神経病治療のメッカであった。そこでフロイトは、当時まで子宮の病とか、原因不明の肉体疾患とか、悪魔つきとみなされていたヒステリーについて学んだのであった。シャルコーはヒステリーの症状が心理的原因によっておこる病気である事実を実証する方法として催眠暗示を用いた。シャルコーから学びとったものは、無意識の作用がヒステリーにどんなに大きな力をふるっているかであった。このシャルコーの観察を身を以て眼のあたりにした経験こそ、人間の意識には、まだ知られていない、ある強力な心理作用、つまり無意識が存在しているにちがいないという強い印象をもったのであるが、週ればこのような無意識への注目も、この体験に発しているのである。

それまでのフロイトは器質的所見を見出すことができる神経系の病気を研究してきたのであるが、ヒステリーのように器質的所見がみつからない疾患は、その原因が精神的なものであり心因性の病気とみなすことによって科学的に診断し治療することができるようになるという見解に達した。この研究成果をウィーンの医師会で発表し、シャルコー説を紹介するとともに子宮のない男性にもヒステリーがあること、暗示によってヒステリー症状を生み出すことができることを唱えた。この発表は出席者の反感を呼ぶところとなり、これ以後のフロイトの永い孤独の前触れとなった。だが、この孤立にもめげず、精神的原因によっておこる身体の病気つまり神経症の研究と治療にフロイトの眼をひらかせたのであった。

パリからウィーンに戻ったフロイトは、神経病医として開業し、1886年9月マルタとの永かった春にピリオドを打ち結婚することになった。

その後のフロイトは次項でふれるように、臨

床家の実践と独創的な構想を次々に発表し、精神分析の創始者としてその名にふさわしい活躍をとげる。そしてナチス・ドイツに追われロンドンに亡命した1938年まで47年間ウィーンに住んで著述と治療に専念したのであった。

3. 精神分析の誕生

忘れ得ぬ人 ブロイアー

フロイトが精神分析を創始することにあたって影響を与えたまず1人目に先輩医師J・ブロイアーがあげられる。ブロイアーはフロイトより4歳年上ですでに高い学問的業績もあり、開業医としても高名であった。彼はフロイトに友情を寄せ、フロイトの貧窮時代に進んで経済的援助を惜しまなかった。

このブロイアーが1880年から2年間治療していた患者、ヒステリー症状を主訴とするO・アンナがいた。ブロイアーはフロイトにヒステリー患者O・アンナに関する情報を繰り返し繰り返し話してくれた。

忘れ得ぬ人 O・アンナ

O・アンナはフロイトの精神分析療法の創始に関係した古典的なヒステリー患者として忘れてはならない人である。彼女は魅力的な容貌と優れた知性と教養を備えた、善意の性格の持ち主であった。彼女が21歳になった1880年の半ばから、父親が不治の病にかかり、母親とともに看病することになったが、看病後1カ月後から、O・アンナ自身が急に衰えを見せはじめ、食物を見ると吐き気がし、感覚脱失を伴う強直性の四肢麻痺や、視力、言語の障害やはげしい咳などの多彩なヒステリー症状をあらわすようになった。同時に彼女には正常なおとなの意識状態とききわけのない幼稚な意識状態を交互に示す二重人格がみられ、その間に自己催眠の状態に陥るのが常であった。

ヒステリー症状があらわれてからコップに口をつけて水を飲み込むことが出来ないという状態が続いていたが、ある日ブロイアーが往診す

ると彼女はこの自己催眠の状態にあり、症状が最初にあらわれた（つまり水を飲むことができないという）発生当時の状況を詳細に語った。すると大変驚いたことに、自己催眠の状態のまま、今まで心に抑えていた不快感をあらいだすべて供述して、急に水を飲みたいと言いだしてなんの抑制もなしに多量の水を飲み、催眠状態から醒めたのである。O・アンナは自ら談話療法、煙突掃除法と名付け自分から希望して他のいろいろな症状についてもこの治療法を続けた。ブロイアーはこの方法から示唆をえて、人工的な催眠状態において過去の心的外傷を思い出させる方法を創始し催眠カタルシスと名づけたのである。ブロイアーと親交の深かったフロイトはこの話を聞いて非常に興味を持った。当時ヒステリーは仮病か、悪魔つきか、原因不明の肉体疾患として軽視されていた病気だっただけにフロイトは深い感銘を受けたのであった。この時の経験が後に有名な「ヒステリー研究」を著わす端緒となったのである。

忘れ得ぬ人 シャルコー

前章で述べたように、フロイトは1885年秋から翌年1886年春まで、パリの偉大な神経学者シャルコーのもとで、神経病の解剖学研鑽を積みたとい願って短期留学をした。ところが幸か不幸か、当時のシャルコーは神経病よりもヒステリーに多大の興味を持っていた。というのも当時上流階級の女性は、よく失神して、失神をしないと上流ではないとみなされる傾向があったので、失神が一種の流行を生む風潮にあった。そのためかヒステリーについては非科学的な病気という考えが流布していた。ヒステリーのけいれん発作はブリッジのように体が硬くなり棒のように筋肉が硬直した。シャルコーがヒステリー患者に催眠暗示をかけるとヒステリーが生み出されたり、逆に消失したりした。このことにより、ヒステリーは心理的な原因によって起こることが示された。心理現象を取りあげたことは当時の精神医学に一大飛躍をもたらす画期的なことだった。フロイトはシャルコーの教えに深く感銘し、はじめてとりつかれた精神病理学の魅力

に胸をおどらされてウィーンへ帰郷した。シャルコーのもとでの経験は精神分析学をスタートさせる発端となった。

催眠療法の放棄

ブロイアーが名づけた催眠浄化法（催眠カタルシス）による治療を続けていくうちに、フロイトはしだいにこの方法にも限界があることに気付くようになった。多くの患者はO・アンナのような自己催眠状態には陥らないし、フロイトが催眠状態にかけようとしても、かからなかったり、かかっても催眠浄化療法に必要なほどの催眠状態にはならなかった。また催眠の効果は一時的にすぎないこと、その効果は医師と患者の関係のあり方に依存し、関係が悪くなり、接触がなくなったりすると効果が消失してしまうことがわかった。

そこでフロイトは催眠にかからないエリザベトに対して、“前額法”と呼ばれる方法を用いていた。前額法とは目をとじて横たわった患者の額を圧して、ある特定の症状に意識を集中し、どんなことでもよいからその症状の由来に関するものを明らかにするような記憶を思い出すよう命じる。患者が何も思い出さないときは何度でもこの方法を繰り返し「どんなことでも頭に浮かんだら言い表すこと」と厳命した。このようにしてフロイトは催眠カタルシス療法の代わるものとして前額法を用いたのであった。ところがある日、彼がいつものように額に加圧して質問すると、エリザベトが「私の思想の流れを質問で邪魔しないで下さい。私の頭に浮かんでくることをそのまま話させて下さい。」と訴えた。

このことは衝撃的な出来事だった。ここからヒントを得たフロイトは、患者を気楽に寝椅子に寝かせて「頭に浮かんだことをそのまま話させる」という自由連想法の発見への契機となった。そして治療法としての催眠を放棄し、これ以後は、自由連想法だけを用いることになった。この発見の誕生こそ、フロイトに無意識の世界の研究を可能にしたものであり、抑圧理論や性的病因説の提起へというフロイト自身の創始に

よる精神分析が誕生した。

フロイト自身が精神分析という言葉を用いたのは1896年である。この用語の誕生はまもなく100年を迎えようとしている。

4. 精神分析療法

精神分析療法の基本概念

精神分析療法の基本概念は意識すると、不安、苦痛、感情をおこすような心的内容（感情や欲求）を意識から無意識に追い払い押し込めようとする抑圧という概念である。抑圧とは、本人が意識したくない不快な記憶など、無意識の領域に閉じ込めておこうとする主体の力である。そしてこの抑圧から無意識化された感情や欲動は、置き換え偽装され、変形されて、空想、夢、神経症の症状のかたちで再現されてくる。精神分析療法は、その症状を治療するために抑圧をゆるめる操作を行うことで、この無意識（無意識化された感情や欲求）を意識化しようとする。治療者フロイトは患者の知性と同盟し、2人の共同作業の中で無意識に対する自我の支配権を確立し心の再構成をはかる。この知性の共同作業は実際の治療過程で、治療者と患者との間で結ばれる治療契約と作業同盟を支えに行われる。そしてこの治療契約の主体は治療者、患者それぞれの観察自我（observing ego）である。とりわけ患者は精神分析療法の治療場面で自由連想を行う主体として自分の内面を観察し、その観察をありのままに治療者に報告する役割を果たし続けねばならない。治療者は患者のこの報告に耳を傾け、患者が伝える無意識的な意味について理解しながら、随時質問や説明を加えてゆく。このような治療者と患者の共同作業が精神分析療法の治療過程であり、この2人の協力関係を作業同盟（working alliance）と呼ぶ。

自由連想法

自由連想法とは無意識のからくりを見抜くことである。患者には「心に浮かぶどんなことでもすべて隠さずに口に出して下さい。」と言って

寝椅子に寝かせる。面接法のように向かい合って面接すると連想が続かない。寝椅子に横になることは、構えがなくてよいということで、顔を見合わすと自由に話すことを妨害するため、やや斜めうしろに坐った治療者は隠れ蓑のようになるのである。そうすることで患者は、自分一人が部屋にいるような気になる。患者が他人の前でベッド（寝椅子）に横になることができるのは患者と治療者の信頼関係が必要である。性生活に不満や問題がある女性ではこうした形で横になることを嫌う。また顔を見ないと心を開かない人は自由連想法がなかなか実行できない。

無意識を意識化しようとする精神分析療法の目的は多くの場合、患者がおこす抵抗によって阻まれる。つまりなんらかの感情や欲求が抑圧されて無意識化されるのは、それを意識することに激しい不快、苦痛、不安、そして罪悪感が生じるためである。したがって、“無意識化”されたものを意識化する際にそれらの不快、苦痛、不安、罪悪感が激しく再現される。これらの感情＝抑圧のために無意識を意識化しようとする治療は妨げられてしまうが、このような現象をフロイトは抵抗と呼んだ。

自由連想法を続けてゆくと大抵の人は抵抗する。そのうち黙ってしまう。患者は終始黙ったままでとても強い緊張感を伴う。治療に抵抗しノイローゼ症状はなお悪化する。（陰性の感情転移という。後に記述）治療者を憎らしくなり治療に非協力的態度をとる。そのうち来なくなってしまう。困ったフロイトは、なんとか治療を続けるために契約費用を先取りした。がそれでも患者は通院を放棄してしまうため、フロイトが考えたのは前払いで月給の何%と治療費を決め、患者にとってその出費がもったいなくてやめるにやめられない額にした。このことを治療契約という。

精神分析療法の場合、治療者と患者の関係がその後の精神療法における力動の発展的基礎となるため、治療に関する取り決めを明確にすることはとても重要である。その契約の内容は、通常治療の日時、回数、費用と支払方法、治療

期間などである。¹⁰

一週間に2日、1回1時間の精神分析を行う。通常いつかは患者は意識化されたことが絶え難い苦痛のためほとんど黙ってしまう。本当に言いたくないことが頭に浮かんでしまってどうしても黙ってしまう。それでも治療契約で高額の治療費を前払いしているのでやめるにやめられず、そのかわりに色々な理由で遅刻したり、休んだりする。つまり精神分析療法はこの抵抗を克服しようとする治療者及び患者の自我の努力と抑圧を守り通そうとする患者の無意識の防衛機制との戦いというかたちで展開されていく。

黙りこくっている患者にフロイトは、「あなたは必ず何かを思い浮かべたはずですよ。あなたは全く客観的な態度で心に浮かんだままを話す義務があるのです。それが適切なものであらうとなかろうといっこうにかまいません。あなたは何かを思い浮かべているのです。それを私に言わない限りあなたの痛みはとれません。」^①これがフロイトの精神分析技術法の核心となった抵抗分析のやり方である。そしてこの「頭に思い浮かんだことは何でも話さなければならない」という自由連想法のルールこそ精神分析療法の第一基本原則である。

転移現象の発見

このように自由連想法を繰り返しているうちに、それまで無意識だったさまざまな幼児的な感情や興奮が意識にのぼってくる。そしてこの経験を通して患者は大人の合理的な態度を確立してゆくのであるが、その解決の途中で患者はこの解放された幼児的な治療や態度を治療者に向けるようになる。

実はそれは本来ならそれまでの生活の歴史の中で別の誰か（たとえば父親や母親・兄弟など）の間で引き起こされたにもかかわらず抑圧されてしまった感情や態度である。これらの感情や態度が治療者に過去の対象（父親・母親）から置き換え転移されているのである。こう考えたフロイトはこの現象を転移と名付けたのであるが、一見治療者個人に対しておこるように見えるこれら幼児的な愛着や憎悪も、実は父母への

愛着や憎悪の投影という側面をもっている。そしてこの転移は治療者からみれば理にかなわぬことで一方的でファンタジーであるが患者にしてみれば、真剣で本気なことなのである。そしてこの転移現象の発見は抑圧の発見とともに分析医フロイトの最も決定的な発見の一つである。

それ以前の医師たちは、患者と医師との間で決まって発生する転移現象を科学的現象としてとらえることができなかった。一例を挙げよう。先に述べたO・アンナがブロイアーの往診を喜び、自分から自己催眠の状態に陥って次々に外傷体験を回想したのも、彼女が亡くなった父親に出会うような気持ちで、ブロイアーの往診を出迎えていたからである。そしてブロイアーもまた熱心にこの患者を診察したのであるが、その熱心さにブロイアー夫人は不信に思いブロイアーとO・アンナの関係を疑うようになった。やがてその症状がほとんど回復に向かうころ、突然O・アンナはブロイアーの子をみごもったという想像妊娠まで抱くようになり、O・アンナの激しい愛着にブロイアーはすっかり恐ろしくなってしまう、O・アンナを見棄て一人旅立ってしまった。このようにそれ以前の医師たちがいずれも挫折せざるをえなかった転移現象を転移現象として1つの心理学的現象として発見し、概念づけその発生を科学的に認識する最初の臨床医がフロイトであった。そして患者が向ける権威的な依存や空想的な性愛転移になれあうことを断固拒絶し、この現象に適切に対応するいくつもの戒めを後世に残すことになった。

陰性転移と陽性転移

一般に転移（transference）は感情転移と訳される場合があるが、この現象には治療者を理想化したり、友好的、友愛的人物とみなす陽性転移と治療者を敵対視したり、意地悪く攻撃的な人物とみなす陰性転移がある。陽性転移は治療者を好ましい人物像とみなす現象であるがために一見すると良好な治療関係であるように思えるが、これは上手に解釈し、洞察してゆかないと患者はとことん依存的になり、あらゆる判断を治療者に求め、甘え頼るようになる。一見

すると治療者に依存しているようだが、それはかつての別の誰か（例えば母親）に対する依存の再現なのである。

フロイトは治療の状況だけからは、このような感情移転の発生原因が正しく説明されるとは考えず、むしろ患者の心の中にすでに準備されていた感情が、分析治療を受ける機会に治療者の上に転移されたのだと推測したのである。この転移現象こそ、患者の過去における父や母に向けていた心の反復の再現である。つまり転移は患者の心の中で互いに争い合うあらゆる心的な力のぶつかり合う戦場となるのである。

転移が抵抗に変わると、どうしても注意を向けざるをえなくなるときがある。というのは治療を中断させてしまうかもしれないからである。転移が抵抗として働く場合は、患者が医師に強い愛情欲求を示し、それが性的欲求をも満たしてほしいということがはっきりしたときにおける、患者自身の内なる葛藤が生じている場合と、転移が敵意や憎しみのような衝動現象がおこっている場合である。この両方が同時に存在することもある。

そこを上手に克服することでコンプレックスを一つ一つ乗り越えていくことが治癒へと導くのである。この転移現象の発生がとても大切であり、陰性感情転移がおこらないということは自由連想の無意識の領域に達していないと言ってもよいだろう。やがてフロイトは転移の分析を通して、患者の過去（幼児期）における父、母との心的葛藤を治療者との間で再現し、洞察していく。この治療過程こそ、分析療法の核心であり、患者を治癒へと導いていく最大の課題であると考えられるようになった。

対話的自己洞察

現在から過去を振り返ることはファンタジーかもしれない。事実がどうかはわからない。しかし現在もそういう形で過去は生きていることを治療者とともに確認し、すべての感情移転を見抜くような、鋭い洞察力と叡知を養わなければならない。

患者は治療者にさまざまな怒りや苦痛や悲し

みをぶつけてくる。つまり精神分析は、治療者と患者という一対一の個々の関係の中で一定の心理的距離を保ち、お互い個としての自立を認めながら、しかもお互いの境界を明確にし、長期間にわたってそれぞれの心の内面を親密に語りあうという、新しい対話的人間関係の探究を意味している。そしてこの治療者と患者との知的な作業同盟を可能にするためにはそれに先立って、治療者自身が対話的自己観察つまり自分自身を内省できる洞察の術を身につけていなければならない。治療者は患者が洞察できるように導くとともに、患者が治療者として自分に向ける転移と抵抗に対する自分自身の心理的な反応、あるいは患者と自分のそのような相互作用についてもその自己洞察を深めていく。この治療上における治療者と患者の相互作用こそ対話的自己洞察の発展なのであるが、このような発展は患者の転移 (transference) に対する治療者の逆転移 (counter-transference) の自己洞察としてはじめて可能になる。

患者が治療者に向ける転移に対して、治療者が患者に向けるさまざまな無意識的反応を逆転移という。

精神分析医は必ず先輩から、精神分析を受け自分の無意識なコンプレックスを知っていなければならない。患者と治療者のコンプレックスが同一で治療者も意識していない無意識的な心的反応が同一だとすると、患者の転移現象の解釈が不可能となり洞察へも発展しない。患者との関係も悪化し、お互い個としての自立も認めることを立ちはだかる。さかのぼればフロイトがフリースに自己分析を受けたように、この教育的精神分析を受けていない人は精神分析医といえない。

治療態度 禁欲規則

「なんでも頭に浮かぶことをそのまま話さねばならない」という自由連想法のルールが精神分析の第一規則である。ところが実際には「なんでも話して下さい。話すことは自由です。」と言って、なんでも耳を傾け受け入れてくれる治療者に対して、実際に「自分の要求をも満た

してほしい」という依存願望が異常に高まってくる。このような患者の要求や期待に対してフロイトが確立したのが禁欲規制である。この禁欲規制は精神分析の第二基本規則である。

フロイトは述べている。「もし分析医が患者を助けてやりたいという気持ちでいっぱいなために、およそ人間が他人から期待することのできるすべての満足を患者に許し与えてしまうとすれば、患者はそれを快適に感じてしまって、人生の困難から逃げ出して、好んでそこに避難所を求めるという結果にしかならない。これでは患者を人生に対してもっと強健に、彼ら自身課せられた課題に対して、もっと行動力豊かにしてあげるといふ治療的な努力を放棄することになる。分析療法ではこの甘やかしは一切避けねばならない。分析医は患者に、満たされない願いを十分に残していなければならない。患者が最も激しく願望し、最も切実に表現している性の満足そのものを満足させないでおくという根本原則はむしろ目的に適したことである。」¹⁰そしてこの禁欲規制は治療者自身にもあてはまるものであって、それは価値観をめぐる治療者の「中立性」をも意味している。

フロイトは述べている。「分析医は患者に対して教師、規範、理性となり、自分の手本に従って人々を教育したいという誘惑をどんなに感じることがあっても、絶対にそれは精神分析的な治療関係における自分の責務でないこと。いやむしろこのような傾向によって分析医が引きずられるようなことがあるならば、それは分析医としての自分の責務に対して不忠実なものであるとのそしりを免れることができないことを感銘すべきである。」¹¹

この治療態度における中立性はフロイトの科学的世界観にその基礎をおくものである。つまりその科学的世界観は特定のイデオロギーを意味するものではなく、むしろその消極的性格によって特徴づけられるものであって、伝承された価値観からも自由で、相互的対人関係のなかで個としての自我と知性を保つ批判的な自主の精神そのものである。

受容と寛容

カウンセラーや精神分析医は物腰がやわらかで親切な人が適していると思われるようだが、これは間違いである。(もちろん大切な要素ではあるが) 寛容とは心が広くて他人の言動をよく受け入れることでやさしいということと共通しているが、精神分析に求められている治療態度は寛容ではなく受容的態度である。やさしいということは裏返せば弱さの表現であり、弱い人も優しいのだ。控えめで謙虚な人は患者に巻き込まれて心理的距離が保てないことがままある。狼えてはいけない。寛容は許容であり、社会的地位の高い人が社会的地位の低い人を許すことで、上下関係が決まっている。これは受容ではない。やさしいということは許容していることであり、上下の関係を取り払うことができない。

カウンセラーとクライアントは、人として平等でなければならない。人として平等でいることにより初めて受容は成立する。自分の権威を維持しているやさしさなら、生徒は目下として位置づけられ本当の意味で生徒は心を開かない。心理的距離も遠い。受容することは心理的距離が適切で人としても平等なことである。このことによってカウンセリングは成立する。

補導は権威的態度の現れであり、これではカウンセリングは成立しない。“教”とは教えることであり、“育”とは育てることである。教えることは上から下への関係であり、育てることは人として平等であることである。カウンセリングは育てるという方向で終始一貫しなければならない。ここに学校におけるカウンセリングの困難がある。なぜなら生徒が反社会的な行動をとると、補導にならざるを得ないからである。処罰しなければならない。処罰は教育ではない。同様に教師の体罰は教育への放棄である。体罰は服従そのものである。これでは子どもの自主性は育たない。カウンセリングもおのずと限界になる。

5. 心の構造論

意識、前意識、無意識の局所論的見地

フロイトは人間の心は意識、前意識、無意識という3つの領域が精神生活に強い影響を与えている見地から述べている。

人間の心には不快で苦痛をひきおこすような考えや記憶を心の奥の無意識に押し込めようとする働きがある。このような心の働きを抑圧という。

無意識とは心の最も奥の層であり、無意識に抑圧されてしまうと、記憶をとりもどしたり自分自身の欲動や感情をなかなか体験することができず、意識化しえない心の深層をいう。

前意識とは意識と無意識の中間にあり、思い出すことも可能で感情や情動を意識できる心の層をいう。

私たちの心の働きは、状況に応じて不必要な感情や欲望や願望を抑圧したり、解放して意識化するという、自由さと柔軟性をもっている。この解放する方向へのこのころの動きを退行という。

健康な心の働きは前意識への退行が自由に進み、抑圧がとれて感情や欲動が解放されるとき、心は休養し、エネルギーは補給され、心の活力となる。気のおけない友達を語り合うとき、おいしい物を食べるとき、眠っているときはとくに退行が進み、抑圧がとれて心の緊張が緩和されるときである。

しかしながらフロイトは患者の中には、治療経過が良好で病状が回復すると、かえって心身の状態が悪くなり、病気、けが、事故などを起こし自らの不幸を招くような人がいることを見いだした。彼らは本人も意識していない無意識的罪悪感に悩まされている人であって、幸福や満足や欲求が得ることができる状態になると、自分を責め自分を罰し、病気や不幸に苦悩することで心の安定を得る。彼らは安心して退行することが出来ず、仮に退行が起きる場合は、自分の意志に反して不随的に起こってしまうのが特徴である。

心の構造論

フロイトは人間の心をエス、自我、超自我という1つの心的装置になぞらえている。この3つの領域の機能が、力動的に関連しあいながら心を構成しているのである。

それぞれの特徴と機能について述べてみよう。

①エス

人間には身体の内部が刺激されたり興奮すると、それを行動にかりたてる力、欲動がある。精神分析学ではこれをエスという。エスは人間のあらゆる本能的な欲望や生物学的、無意識的な源であり、自我や超自我にエネルギーを供給している。エスの内にひそむ本能的な欲動や衝動が内的外的要因によって刺激されると心的エネルギーが高まる。この心的エネルギーの高まりは心の中でさまざまな葛藤を生じさせる。エスはこの緊張状態から一刻も早く脱出しようとするのである。現実原則を無視し、ひたすら本能的な欲望や衝動のみに満足を求め快楽原則のみに従う。論理性は欠き、社会的価値を無視し、それゆえ人間はイドだけでは、現実の社会には受け入れられない。

エスの性質は次の通りである。

1. 無意識的で決して意識されることがない。
2. 個人の本能的エネルギーの貯蔵所であり、行動の源である。
3. 快楽原則のみに従い、快を求めて不快をさける。
4. 非論理的、反社会的である。
5. 原始的である。

自我

自我の基本機能はエスにおいて引き起こされた緊張を現実的な方法で解消することである。エスが快楽原則のみに従うのに対して、自我はエスが社会に適応できるように、我慢をさせたり、欲望を押さえさせたりする現実原則にエスを従わせようとする。自我は人間が論理的、社会的に行動できるようエスを調整しコントロールしているのである。(ただしエネルギーはエスからもらっている。これを備給という。)

自我の性質は次の通りである。

- ① 主に意識的である。
- ② 外界に働きかけ、エスの緊張を現実的な方法で解消しようとする。
- ③ 現実原則に従い、人間を社会に適応させようとする。
- ④ 論理的、社会的である。

超自我

超自我の基本機能は自我を監視する役目を果たすことで、一般の人々における道徳的な良心、罪悪感、自我に理想を与えるなどの機能を営む。超自我はフロイトによれば次のように形成される。つまりエディプス・コンプレックス(後に記述)を克服する過程で異性の親(男の子なら母親に、女の子なら父親に)への近親的な愛情を断念するのは、同性の親の脅かし(男の子ならペニスを去勢されてしまうのではないかと不安、女の子ならペニス羨望)や罰を与えられるのではないかとというなどのためである。その過程で禁止者としての同性の親が自我の中に取り入れられるというのである。そして自我の中に取り入れられた超自我は自我を監視することで、自我がルール違反しないよう道徳的な良心や無意識的罪悪感の形で機能するのである。

親の禁止や強制をしつけ(躾)という。しつけとはルールを覚えさせることであり、親は社会的規範や規則を守らせようと子供をしつける。ほめられたり、叱られたりするうちにしだいに両親の価値観や社会規範に従って行動がとれるようになる。つまり子どもは両親のしつけを通して、心の中にも親が介在しているようになり、外から賞罰を与えられなくとも自ら、自分自身に賞罰を与えるようになる。無意識的罪悪感が生じるのはこのためである。

心の中の自我を上手に取り込み、満足することは生きることであり、社会的ルールを守り、社会規範にのっとって賢く生きる。社会規範のもとになっているのは、親の禁止強制などの親の規範であり、法律や倫理感である。つまり親のしつけそのものが超自我といえよう。

超自我の性質は次のようにまとめることがで

きる。

- ① 自我より意識的であるが範囲が少ない。主に無意識である。
- ② 内在化された両親の価値観や社会規範から成り立っている。
- ③ エスにブレーキをかける。特に性的、攻撃的な行動を抑圧する。
- ④ 自我の行動をコントロールする。

神経症の起因

人間は行動にかりたてる力、エスによって“こうしたい”というさまざまな欲望が生じる。詳述したようにエスは自我と超自我が対立し、心の中でさまざまな葛藤が生じている。正常な心であれば、心の中にどのような葛藤があるか観察する自我の働きがあって、その葛藤を自覚してその人らしい解決の仕方、判断を下して行動することができる。健康な自我は、時にエスの満足を遅らせたり、欲求不満に耐える能力も備えている。⁹⁾

神経症は頭痛、めまい、動悸、腹痛、手足の麻痺などさまざまな症状を伴う、不安を主訴とする中核障害である。それも自分が環境や現実に対応することのできない切迫した苦痛を体験するものである。神経症では超自我や現実からの欲求を優先させる傾向が強いためにエスが抑圧され、不安の代理あるいは象徴化として症状が形成される。つまり神経症になることによって超自我との葛藤や現実への適応を避けることができるのである。

次に神経症の代表的なものを簡単に概述する。

不安神経症

神経症のなかで最もよくみられるタイプ。その名が示すようにいろいろなかたちの不安があらわれてくる病気である。

不安神経症は異常な言動や反社会的な行動によって人目をひくようなことのない病気で、患者も自分が病気であることをよくわきまえているだけに、この神経症の苦しみはあまり知られていない。

患者はいいようのない鋭い不安感のため、め

まい、冷や汗、吐き気、震え、手足の痺れなど自律神経症状を中心とするさまざまな形の不安症状をあらわす。患者はそのため死ぬのではないか、発狂するのではないかという恐怖にかられ、そのことがまた不安を強めている。

対人恐怖症

対人恐怖とは、他人と一緒にいるとき、強い不安が生じ、緊張が激しく、そのため他人に嫌がられるのではないか、軽蔑されるのではないかと心配し、対人関係からできるだけひきさがろうとする病気である。

その種類には、自分の顔が人前で赤くなることを悩む“赤面恐怖”、他人から見られる“視線恐怖”、人前で身体が震える“ふるえ恐怖”、自分の身体が臭うのではないかという“自己臭恐怖”、自分の顔や体が醜いのではないかという“異形恐怖”などがある。

こうした神経症の精神療法ではわが国の代表的な治療に森田療法がある。

強迫神経症

これは、支配的でおしつけがましく、自分は優位な立場をいつも守り、相手を屈従させようとする人に多く見られる。また正義の見方で道徳家だと過信し、相手の迷惑を省みない人にも多いといわれているのがこのタイプである。自分でも不必要なことだと知り、不合理なことだとわかっていながら、自ら判断するさまざまな意識内容を追い払うことができず不安に苦しむのである。

例えば、電車の吊革が汚くてさわれない不潔恐怖や、戸締まり、火の元、水道の蛇口の開閉を気にする確認強迫などがある。

すぐれた治療法として、あるがままの自分を受け入れる森田療法がある。

抑うつ神経症

抑うつ神経症は、抑うつ状態が症状の中心となっている病気である。うつ気分であっても病識はあり、幻覚や妄想がないことが基本である。比較的軽症で、睡眠、食欲、性欲などはあまり

障害がない。心因性で多分性格上の問題とからんで発症する。愛する人の喪失や生活上の困難や家庭における問題が誘因となる。主観的な気分の異常が中心となる。

治療法としては抗うつ薬や抗不安薬と併用して認知、行動療法的アプローチが試みられている。

6. 性欲論

フロイトは多くの患者を見るうちに、人間の精神的発達には性の成長が基本であると考えようになった。フロイト以前は一般に性欲は思春期になって第二次性徴が発達するにつれて開始されると考えられていた。しかしフロイトによれば人間の性欲活動は出生後まもなく現れ、4～5歳の終わりに頂点に達し、エディプス状況をあらわし、その抑圧とともに潜伏期に入って休止し、思春期とともに再び開始される。そして思春期以後のいわゆる性活動の原型が幼児期につくりあげられるというものであった。

性的と性器的の違い

フロイト以前には性的というと、何かしら秘密めいた猥せつな表現を含むものであったため学問の対象にはならなかったが、フロイトは性的と性器的とを区別した。つまり性器的とは男性と女性の性生活（性器による結合を目的とする性行為）を目指すものであるのに対し、人間を動かしている広い意味での性本能を性的と区別した。自己保存本能とともに性的本能を、人間の二大本能とみなし基本原理を明らかにした。この性的なエネルギーをリビドーという。

リビドーとは

リビドーとはフロイトが用いた性的エネルギーの概念であり、彼自身は次のように説明している。「リビドーとはまったく飢餓と類似したもので、衝動－飢餓の場合の食物摂取のようにこの場合には性衝動を発現させる力の名称である」⁹と。リビドーは生得的にそなわった本能

エネルギーであって発達とともに成熟する。次に述べるフロイトの幼児性論によればリビドー発達は、口愛期、肛門愛期、男根期さらに思春期の性器期へと発展するが、それぞれの段階に対応する快感刺激帯（性感帯）、充足の目標、対象をもつと考えられた。

心理的外傷

人間は出生時に精神的な外傷を受けて生まれてくる。胎児は羊水の中ではすべて自動調整の中、呼吸までもが賄われていたが、陣痛が始まり、狭い産道を無理矢理引き出されて出生している。苦しみがきながら……。

そのことが精神的な外傷になりコンプレックスになるとフロイトはいう。その意味からいってもコンプレックスのない人はいない。

幼児の性

フロイトは幼児にも性欲があるとして学会ではひんしゅくを買った。しかしこれは性器的と性的を同一とみなしたために誤解されたのである。実際子どもを観察していると、彼らの性生活に直面せざるを得ない場面を見かける。以下順に追ってその発達段階をみてみよう。

口愛期（口唇期）；出生から1才位まで

乳幼児の場合のリビドーは生命を維持していくための栄養摂取の機能と結びついている。その快感を感じる中心は口であり、口唇や舌などが乳房を吸う快感部位となる。この時期では乳児は母親に全く依存しているため、母子関係のあり方が個人の性格の基礎となる安定感や信頼感の形成に影響を与える。

この母親の乳房を吸うことは性生活全体の出发点となり、成人してからも接吻などの口愛的行為で性的満足を得ることにつながるし性衝動の最初の対象にもなっていく。

口愛期における精神的な外傷は離乳である。上手に離乳しないと、過食症、拒食症、ヘビースモーカー（たとえば刑事コロンの葉巻）指しゃぶり、爪かみなどを生む結果となる。母乳で育った子どもが親となりわが子を出産し母乳で育て

る意欲を持つ。これとは反対に人工栄養で育った母親はわが子をミルクで育てる傾向がある。そのことは育てられた過去の再現であり、無意識のあらわれである。

肛門愛期；2歳～4歳位まで

この時期になると幼児は大小便の排泄を自分で調整できるようになる。括約筋を閉めたりゆるめることによる粘膜部分の興奮が快感と感ずるのである。特に大便を体内に保持したり排泄することをコントロールして、できるだけ大きな快感を得ようとする。

この排泄作用を通して親のしつけが始まる。上手に出来ればほめられ、失敗すると叱られる。この時期に初めて自分の快感と評価との調節をしなければなくなり、葛藤に直面する。これがトイレット・トレーニングである。

排泄そのものを幼児自身は少しも嫌悪感を抱いていない。むしろ自分の身体の一部と思って自分の中にとっておきたいという感情がある。大便は大切な贈り物であり、お金であると思っている。

トイレット・トレーニングが厳しすぎたり早すぎたりすると、サディスト・マゾヒストになることと同様、大便をあげるのも惜しいくらいのケチになり、我の強い拒否的な性格が形成される。また反対に上手に克服できれば、幼児に自尊心を獲得することができる。

男根期；3歳～5歳

リビドーの対象は肛門愛期までは男女とも母親に向いている。2～3歳の頃からは性別に気づき男の子は自分のペニスを自覚するようになり、女の子はなぜ自分にペニスがついていないか疑問を持つようになる。3歳～5歳頃より性生活の神秘を探ろうとする性的好奇心を活発にさせる。男の子は母親に対して性的好奇心を示し、夜は母親と寝たがり父親を疎んずるようになる。同様に女の子は父親への優しい愛着、母を余計なものとして取り除き、その地位を自分にとって代わって占めようとする態度や、成熟した女性と同じような媚態が観察される。そし

て去勢コンプレックス・ペニス羨望などが抱かれる。これをふつうエディプス・コンプレックスという。

エディプス・コンプレックス

幼児は男根期に入ると性の区別に目覚め、異性の親に性的な関心を抱くようになる。特に男の子は母親に対して性的欲望を感じて、父親を恋敵とみなして嫉妬し、父親の存在を邪魔に感じ、父親に嫉妬や憎しみを感じるようになる。他方彼は父親を愛しているために自分の抱いている敵意を苦痛に感じ、またその敵意のせいで父親に処罰のため去勢されるのではないかという去勢不安が生じるようになる。このように子どもが両親に対して抱く愛と憎しみと恐怖の3点を中心として発展する観念複合体[®]をエディプス・コンプレックスという。

この名称は周知のようにギリシャ神話から引用された。エディプス王は父であるとは知らずに自分の父を殺害し母を妻としたが、やがて真相を知って、自ら両目をえぐり抜いたエディプス王の悲劇に由来している。

陽性エディプス・コンプレックスと

陰性エディプス・コンプレックス

このコンプレックスは陽性エディプス・コンプレックスと陰性エディプス・コンプレックス(エレクトラ・コンプレックス)の2種類ある。陽性エディプス・コンプレックスでは男の子が母に強い愛情を示して父を憎み、女の子が父に強い愛情を示して母を憎むが、陰性エディプス・コンプレックスではこの関係が逆になり、男の子が父に性的愛情を抱いて母を憎み、女の子が母に性的愛情を抱いて父を憎むようになる。前者は正常な幼児の発達過程で経験されるものであって、今後、男の子は父に対する憎悪を抑圧して、父を同一視することで男らしさを獲得し、女の子は母を同一視することで女らしくなっていく。ところが後者の場合、男の子が女性性に向かった本能素質が強い時には、父への敵意や競争心を放棄して、母を同一化することによって父に愛されようとして、男性性を失って退行

的な同性愛傾向を強めていく。このようにこのコンプレックスの解消のされ方が性格形成と深く関わるが、その他にも性的同一性の確立、超自我の形成、神経症の発症とも重要な関連をもつと、フロイトは主張したのである。

潜伏期；6・7歳～12・13歳まで

エディプス期が終わると潜伏期にはいる。6～7歳になると社会的関心が広がり、性的発達は一時的に休止し、潜むようになる。エディプス・コンプレックスの克服とともに、子どもは家族以外の仲間に興味を持つようになり、従党時代といわれる時期に入る。そして、それ以前の体験や性的関心は抑圧され幼児性健忘の彼方にいってしまう。

思春期；12・13歳～14・15歳まで

この時期になると、身体的成熟が急速に進み性衝動がはじめて異性愛的なものに結合される。別名性器期といわれ、これまでの前性器期と呼ばれた幼児期とは区別される。

思春期においては非常に強い感情の動きが観察される。それは幼児性欲がエディプス・コンプレックスの抑圧とともに潜伏期に入り、思春期において再開するためである。

この時期から子どもは両親から離れて一人の社会的成員として自立しなければならない。この課題に立ち向かうためには、男の子にとっては自分のリビドー的願望を母親から引き離して、他の異性に愛の対象を選ぶように向けなければならない。もし父親と反目状態であればこれと仲直りし、陰性エディプス・コンプレックスを引きずったままであるならば、必ず克服しなければならない。この解決の仕方がうまくいかないと、男の子は一生涯父に頭が上がらないようになり、自分のリビドーを異性に転移させることが困難となる。また神経症をさらに誘発させることにもなる。

7. 防衛機制

防衛とは、それを意識すると、不安、不快、苦痛、罪悪感、恥などの情動や欲望を意識から追い払い、無意識化してしまう自我の働きであって、あくまでも心の中で起こる無意識な過程である。この防衛によって心は主観的安定を保つことができるのである。

次に自我の防衛規制について紹介する。

回避・逃避を基本とする防衛規制

1) 抑圧 (repression)、

意識的な場合 (suppression)

それを意識すると、苦痛、不快、不安、恥、罪悪感などの感情となる思い出、思考、記憶等を無意識化してしまう自我の無意識的働きで防衛の原型である。具体的には思い出せない、忘れてしまった、分からないという形をとることが多く、しばしば本人は抑圧している内容にふれられると、ばかばかしい、不快だ、いやらしいという感情で反応する。

コンプレックスがないという人に出会う。この人は無意識的に抑圧しているからコンプレックスがないと思っているに過ぎない。人間は毎日挫折の中で生きているので不愉快な体験、心に傷がつくことはどんどん捨てて生きている。本当に心が傷つくと抑圧して思い出せないようにしてしまう。コンプレックスは現実の葛藤の苦しみと過去のコンプレックスが二重写しになるとパニックになる危険がある。そうならないために徹底的に拒否し、抑圧してしまう。

2) 否認 (denial)

不快なことや苦痛な現実の事象に対して顔をそむけ目を閉じる行動にたとえられる。否認の場合、一定の事実そのものは認知しているのであって、事実そのものの心的な意味を認めない自我の働きである。

例えば他人が悪意から自分の作った料理を食べなかった場合、その事実は認めても、その事実が自分に対する敵意のあらわれであるとは認めないのが否認である。そして否認事実の過小

評価や空想（ファンタジー）を伴う。

否認は顔をそむけ目を閉じる行動をとるため、その結果やけにこだわりをもつことになる場合がある。またコンプレックスが浮び上がってくる場面になると突然感情的になり拒否的態度を示す。かつて万引きをした者が、直接に犯人とはいわれていなくてもその疑われていることを感ずくと頑なに否認するのは、かつての罪の意識がよみがえってくるためである。

3) 隔離 (compartment)

ある2つの心的な意味のある結びつきを切り離し、両者を隔離することによって不安、苦痛から逃れる心的機制である。例えば死者に触れるのを恐れるのは、同じ人間として自分と死者が結びつくのを切り離してしまおうとする隔離による。このような隔離は一定の隔たりをおくとか、おまじない、おはらい、儀式などの魔術的行為によって行われることがある。例えば葬式、成人式、棟上式など。これらの儀式は括弧にくくってしまうことであり、自分とのかかわりをわからなくしてしまうことである。強い苦痛をしまいこんで抑圧してしまう。心のブラック・ボックスに押しこめることである。現実葛藤の中で思い出しそうになるとパニックになってしまう。初七日、法事はしきり直しである。だから儀式は単なる形式とは言えず現実の生活の中ではとても重要である。

このようにフロイトに説明されると儀式の意味が解明される。結婚式で神に誓うのは、自分で自分に杵をきせるのだ。“一生愛せるか。”パラドキシカルに言えば一生愛せないから神に誓うのである。自分で枷をはめて自身を制約すること、とでも言えよう。

逆転を基本とする防衛機制

感情や欲動を相対するものに逆転する防衛機制である。例でよくあげられるものは、腹のたつときの手淫である。(怒りを性的興奮に逆転する。)

1) 反動形成 (reaction formation)

逆転における代表的な機制。例えば本当は嫌いな人であるのだが、拒否的態度を示すと罪悪

感が生じるため、愛情的な態度で接することなど。この場合本人は相手への憎しみを自覚せず、むしろ愛情を向けていると思っている。ただし反動形成はどことなく、ぎこちなく、わざとらしさがつきまとう。

ジャンバル・ジャンの“ああ無情”はこの反動形成がよく物語られている。きわどいことをして金持ちになった男が、福祉事業に力を入れるのもその実例である。

3) 打ち消し (undoing)

ある感情や考えを意識に浮かべたり、そのような態度、行動をあらわした場合罪悪感が生じるので、超自我に認められるような、反対の態度をとることによってそれらを打ち消そうとする機制をいう。つぐない、やり直しともいう。例えば“二度あることは三度ある”ということわざは、一度ならずも二度三度同じ失敗を繰り返しやすいことを昔ながら知っている。これも一種のやり直し、または打ち消しと思われる。病的な例としては、強迫神経症における強迫手洗いがあげられる。

置き換えを基本とする防衛機制

無意識の中でのエスは、移動性がさかんで一定の対象から別の対象へ移動したり、一定の充足方法から別の充足方法へと移動する性質をそなえている。自我はエスのこのような特徴を利用してエスをコントロールしようとする。このようにして発達したのがこの防衛機制である。

1) 象徴化 (symbolize)

自分の行為をあらわにすると都合の悪いことをサインや記号にしてしまうこと。とくに夢ではシンボルとして使う。略字略語のようなものである。夢における象徴化は欲動や感動の直接的な表現法からより間接的な表現への置き換えである。(男性をネクタイ、蛇、鍵に置き換えられる。)

表象にはこの他に事実関係に基づく表象(富士山や桜と日本、皇室と菊の紋章)と宗教・芸術における比喩的な象徴(灰色は賄賂または疑い、赤は情熱)などがある。

2) 知性化 (rationalization)

知性化(合理化)は特定の欲動や感情を直接体験したり表現するかわりに、これを抑圧し、知識の獲得や思考を通して、これらの感情を置き換える最も適応性の高い防衛機制である。例えば直接的な性欲望を性的な研究に置き換えたり、他者への攻撃性を論理的思考と批判力に置き換えることなど。しかし知性化が余りにも過剰で病的になると、何事も出来ないことはないと思ひ込む全能感の虜になってしまう。

3) 昇華 (sublimation)

性欲や攻撃性など直接満たされない欲望や感情を社会的に価値のあるものに置き換えることによって成立する学問、文化、芸術の基礎となる心理機制である。例えばスポーツや芸術活動にエネルギーをそそいだり、自分の内なる思いを小説に綴ることなど。

適応性が高く、高い評価を受け、創造性を培う防衛機制である。

自己愛的自我を基本とする防衛機制

フロイトは乳児のごく初期の段階では、自分と他人、自分と外界との境が明確に認識できないときがあるという。そしてこの段階で働く心理機制は快のものをすべて取り入れる「取り入れ」と自分の内部の不快なものをすべて吐き出す「投影」である。そしてこの2つの機制を自己愛的な自我の機制と呼んでいる。

1) 同一化 (introjection)

同一視 (identification)

① 愛情、依存対象の同一化

愛している人と親密感や一体感を保つために対象の特性にありかた同一化。特にアンビヴァレンス(両立的)な感情や分離不安や敵意が高まるときよく用いられる。

例 アイドル歌手への同一視。

② 失った愛情、依存対象との同一化

失った対象を自分の中に取り入れる事によって、その対象の喪失や不在を否認する。

例 メランコリー。

③ 攻撃者との同一化

自分を攻撃する対象に同一化することによ

て相手の攻撃の不安を防衛し、逆に攻撃者を自分の支配下におこうとする。この同一化によって攻撃は自分から発するものに逆転する。

例 いじめられた子がいじめっ子に変身する場合。

④ 罪悪感を向けた対象との同一化

ある対象に愛と憎しみのアンビヴァレンスな感情を持っているとき、憎しみについて罪悪感をおこし、相手の抱えている病気や不幸や苦しみに同一視して、自己処罰的な同一化をとる。

⑤ 羨望を向けた同一化

自分がそうなりたいと思っている対象にあやかり、その対象と自己を同一視することによってその対象の満足と自己の願望を同一視する。

2) 投影 (projection)

それを認めると不快で苦痛や罪悪感が起こるような感情や欲動を抑圧し、他人がそれらの感情や欲動をもっていると投影する機制をいう。

① 主語が逆転する場合

もっとも一般的な投影は「私はあなたを憎む」が「あなたは私を憎む」という形で主語が逆転する場合である。自分の中の愛情や憎しみが抑圧されて、「あなた」に投影される。これが被害妄想や被愛妄想である。

② 罪悪感の投影

自分の中に罪悪感が起こっている時、それを抑圧して相手を怒ってみたり、怒られるのではないかと不安になる。

以上みてきた自己愛的な防衛機制は、本来は自他の区別のつかない乳児のごく早い段階にみられるものである。従ってこれらの機制が現在用いられる場合には、自我の退行が起こっているのが一般的である。

8. 夢

私たちは毎日いろいろな夢を見る。なぜそのような夢を見たのかと考えるとき、夢を見た本人でありながら、自分自身にも全く不可解で困惑してしまうことが日常経験することである。実際には、終夜脳波をとり続けるとレム期(逆

説睡眠ともいう) といつて夢を見ている間にあたかも覚醒時のような脳波があらわれる。レム期があらわれたのでその人を起こして夢を見させないようにすると、睡眠不足とあいまって翌日は不機嫌な状態になる。夢を見ていることはよく眠っているということであり、夢ばかり見たからよく眠れたのである。つまり夢は、睡眠と覚醒の中間状態というもので、睡眠中に働きかけてくる刺激に対する心の反応様式なのである。

フロイトは夢の解釈によって、夢は無意識的な抑圧のあらわれであり、睡眠中の精神活動であること。また無意識には、本人にもそれを知っていると知らずにいる心的事象があること。自由に浮かぶあらゆる思いつきは、コンプレックスによって拘束されていること、という3つを前提に夢の解釈を解明しようとした。ここではフロイトが夢をどう捉えたか、その概要について簡単に述べてみたい。

フロイトの夢理論

夢は、睡眠中の精神活動である。睡眠によって覚醒時の自我活動は低下し、自我は意識過程から無意識過程へ退行しようとする。そしてこの無意識における心的現象はそのまゝの形で意識界へいこうとするが、このまゝの形では超自我(検閲者)の激しい非難にあい、不安を生じ睡眠を妨げてしまうので自我は夢を変えて、意識可能な形に加工する。これが夢の仕事である。こうして加工されたものが日常見られる夢である。加工される以前の夢を潜在夢、夢として意識される夢を顕在夢という。

夢の歪曲は潜在夢を顕在夢に置き換える作業中につけ加わり、夢を異様で不可解なものにしてしまう。なぜ歪曲されるか、わかりやすく述べてみよう。例えば、近親者への愛、解放な性欲、親友への復讐など、認めがたいが無意識にもっている願望は、社会的に認められず非難されるものである。夢を見た本人にとっても不快で認めることができないので、超自我は検閲を働かせて歪曲してしまう。この無意識の葛藤を解決する心的機制として、移動、圧縮、象

徴、劇化などが行われる。

そしてこのような夢の機制による加工素材として、昼の残物(days rest)つまり日常生活体験が用いられる。さらに夢からさめた後、本人は夢の中の不可解な部分を合理化したり、意味づけを試みようとする第二次加工が加えられる。

本来夢は自分の欲求願望を、視覚的な映像を用いることによってあらゆる精神活動の退行的形態である。しかも以上述べた夢の加工によって、直接的にはその意味が、曖昧になっているが、一定の解釈方法を用いればその無意識的な意味を理解できるのである。夢の解釈によって私たち自身の無意識の世界への接近も果せるのである。

夢判断における個別的方法

夢の解釈方法の詳細については他の本にゆずることにし、ここでは夢の象徴的表現のみにとどめたいと思う。

夢を見た本人にどんな夢を見たか尋ねる。この場合、顕在夢と潜在夢との間に一定の対応関係が見いだされるときがあるが、この場合前者は後者の“象徴”となる。そしてこの両者の関係を解明していくのが夢判断における解釈である。フロイトは夢の構成要素それぞれについて、自由連想法を行うことで(代理物)(象徴)を浮かび上がらせ、それらの連想の流れを再構成していく個別的方法を行った。つまりそれぞれの夢の象徴は、夢見る本人の過去の歴史のなかで独自の意味を持っているものばかりなのである。

以下にフロイトの挙げた象徴的表現の実例^{②④}を若干あげてみる。

人間の身体全体(家屋) 男性(ネクタイ、帽子、外套、蛇、部屋をあける鍵) 女性(かたつむり、貝、白い下着、リンネル、木材、紙といった材料)

子どもや兄弟姉妹(小動物や害虫) 裸(衣服や制服) 男子の生殖器(数字の3、機械)

陰茎(ステッキ、傘、棒、樹木、メス、あいくち、槍、サーベル、ピストルなど) 女性の生

殖器（穴、窪み、空洞、容器、ビン、箱、トラック、缶、ポケット、舟、風景、庭など） 男女の陰毛（森、繁み） 愛人（装身具、財宝） 去勢（歯の脱落、抜歯） 子宮（戸棚、炉、部屋） 乳房、お尻（りんご、桃、果実一般）etc.

以上のように、夢は何でも象徴化するのではなく、潜在的夢思考の特定要素のみを象徴化する。とりわけ夢に現れる象徴的な表現は、圧倒的に性的対象や性的関係を置き換える際に用いられる。

9. 失錯行為

失錯行為とは私たちの日常生活において、毎日のように観察されるような、言い間違い、読み違い、書き違い、度忘れ、置き忘れ、紛失などをいう。あまりにもありふれた現象であるために、取るに足らないつまらないことと思われていたこの行為を、精神分析研究の対象として取り上げ、その意味づけを明らかにし、無意識の発見の端緒となった点に、科学者フロイトの鋭い観察力と思考力を読みとることができる。

フロイトはこれら失錯行為を、本人の意識的な意向と、この意識化を妨害する無意識的な意向との葛藤によって生ずる結果であると考えている。このような考え方こそ精神分析の基本となる力動的見地にほかならない。

いくつかの例をあげてみよう。例えば、最も頻繁に起こる言い違いとして言おうとしていることと反対のことを言っている場合を考えてみよう。ある上司の夕食に招待されて苦手のパイアがデザートとして呈されたとき、「いただきます」というところを「ごちそう様でした」と言い違えてしまった時、本人はこれから食べるつもりでも、食べたくないという反対の意向が強く働いて、言い間違いを引き起こしてしまったのである。

次に、必ずしも言い違いが正反対の言葉にならない場合でも、対立する意味が表現される例をあげてみる。出来の悪い部下をもつ上司が、年功順列から仕方なく課長に昇格させることに

なったが、「これからもしっかりやるように」というつもりが「誠に恐縮です」といってしまった。これは仕方なく昇格させた上司の気持ちが、そのまま正直な気持ちになったためである。

また相手からお礼をいわれる立場のものが、逆にこちらから、「結構な物を……」と喋って言葉を濁してしまうこともよくある。

これらはいずれも、一つの意図が他方の意図を完全に代理することによって正反対のことが口に出されるのであり、無意識な抑圧のあらわれの結果である。

以上の例と対照をなしているのは、言い違いが言葉の体をなしていないために、言い違いの意味がなかなか推察されない場合である。

ある青年が性的に関心を抱いていた女性に対して「お送りしましょう」というつもりが「おおかりしましょう」と言ってしまった。この場合「送る」という語と「犯す」という語とに分類され、青年の「犯したい」という無意識的願望が歪曲されたためと推測してもそう無理はないであろう。

この例では一つの意図が他方の意図を歪曲または変形したために、二つの意図の混合が出来上がり、そのために一見意味不明な表現が出来上がったのである。

以上のように失錯行為は三つのグループに分類される。第一に「妨害する意向」があらかじめ本人に分かっているグループである。（上述した例では、本人は食べたくない気持ちを抱いているが、口に出すのを差し控える場合）第二に「妨害する意向」が自分の気持ちであるとは認めるが、言い違いの直前に心の中で働いていたことにまったく気付かないグループである。第三のグループでは「妨害する意向」を解釈されると、本人の頑強な否定にあい、そんなことは考えてみたことがないと主張するグループである。そしてこの場合、本人は全くその意向を意識していないと抵抗する。以上の三つのグループがある。

そして言い間違いから、忘れ物をする、約束の時間に遅刻する、約束を変更する、出席するといっておきながら後から用事ができたといっ

て会に参加しない、といった失錯行為全体を考察してみると、私たちの心には、本人の自覚しないままに活動しているいろいろな意向や願望があり、無意識の力によって盲目的に支配されていると理解することができる。

フロイトは夢の解釈や失錯行為の研究を通して無意識の心的決定論を世に問うことになったのである。

10. おわりに

以上、フロイトの生涯と思想、精神分析の誕生と、無意識の発見について概説した。限られた紙面でその業績すべてを紹介することには限りがあったため、女子短大生が、今後の人生を生き抜くうえで、どうしても必要な基礎知識を概述したつもりである。読み直してみると、どれも中途半端で赤面の至りであるが、岐阜大学の恩師中井幹教授の勧めもあり、私の研究ノートを投稿させてもらった。中井先生は、忘れてもいいからノートをとること。このことはいつとはなしに知的な資産となる。人の話をきちんとメモし書きとることが能力を高め、創造性、独創性を培い、新しい価値観が取り込まれることになる。…とノートをとることの重要性を常々提言されている。その先生の教えを受け自分の価値観で自分なりの文章を書いてみた次第である。

なお、本稿の考察を基礎として次稿においては心に対する他者への理解（子どもを中心に）という観点から論じてみる予定である。

謝 辞

本論文の提出にあたり、ご指導いただきました岐阜大学教授中井幹先生に心から感謝の意を表します。

引用参考文献

1. 『フロイト』講談社 小此木啓吾著
2. 『フロイト 精神分析入門』有斐閣新書 小此木啓吾、馬場謙一編
3. 『治療教育における面接の手引』岐阜大学治療教育研究紀要 中井幹著
4. 『精神分析講義録』中井幹著
5. 『カウンセリングを学ぶ』有斐閣選書 水島恵一、岡堂哲雄、田畑治編
6. 『性格心理学』有斐閣ブックス 依田明著
7. 『こころの科学』日本評論社 1987年月号「特集現代の精神分析」小此木啓吾編
8. 『こころの科学』日本評論社 1985年創刊号「特集神経症」山下格編
9. 『精神分析入門』岩波新書 宮城音弥著
10. 『新版精神医学辞典』弘文堂 加藤正明編

— 児童教育学科・初等教育・心理 —